第75回岩手県社会福祉大会 トークセッション
東日本大震災津波から11年
～今ふるさとの地と人を想う～

第75回岩手県社会福祉大会（10月28日、盛岡市、岩手県民会館大ホール）において行われたトークセッション「東日本大震災津波から11年～今ふるさとの地と人を想う～」の概要をお知らせします。

【コーディネーター】
淑徳大学総合福祉学部
准教授　山下 興一郎 氏

被災された方々の支援活動を通して感じる「様々な想い」をキーワードに、これまでの活動とそれを支えた想い、現在のふるさととそこで暮らす人々への想い、ともに生き、ともに支え合う福祉社会を展望した復興後の未来を共有し、これからの復興に向けた未来への決意を確認する機会とします。

【語り手】
釜石市鵜住居地区民生委員児童委員協議会　市川 淳子 氏

―支援する側・される側の想い

様々な想定外の出来事と向き合えたのは、同じ民児協の仲間がいたからです。何気ない仲間との会話の中に、現状把握と支援対応につながるきっかけがあり、一人で問題を抱え込まずに向き合う姿勢が、私たちの組織力を強化してきました。難しい問題に直面した際、子どもたちの明日や未来を考えて話し合うと解決策や対応策が必ず見出されました。地域の皆で子どもたちの命を守り、育成する思いがある限り、鵜住居は再生し続けていくと信じています。

また、私は、被災者の一人になり、支援する側・される側両方の想いを理解したことで、困った時に自ら助けを求める大切さを知りました。助けを求める勇気を持つことが早期支援につながります。支援してくださった多くの方々に深く感謝申し上げます。

大船渡市社会福祉協議会
主任　今野 智子 氏

―寄り添い続けた11年

決して一人ぼっちにさせない。その想いで被災者の方々に寄り添い、歩んだ11年でした。

震災を乗り越えてきた方々が安心して集い、ともに助け合い、支え合えるような場が多くの地域で増えてほしいです。

大船渡市社協では、椿の吊るし飾りを作成しています。全国の皆さんに向けて椿の花を通して感謝の思いを発信する取組です。震災を振り返り、決して風化させないという思いを共有することが大切です。人は決して一人では生きていけません。気にかけたり、気にかけてもらったり、そのつながりが安心感や安らぎを育み、生きる力へと導いてくれることを生活支援相談員の活動を通して学びました。今度は、皆さんからいただいた力を地域へ根付かせ、住民が安心できる地域を作っていきたいです。

岩手県社会福祉協議会
元事務局長　右京 昌久 氏

―誰一人ひとりぼっちにしない

復興の未来へ向けて、避難所の改善、生活支援相談員の平時の配置、支援者を支援する仕組みの体系化、災害時における行政・NPO・ボランティア・社協による長期的な連携が必要だと考えます。

災害時、誰もが自分や家族のことで精一杯である時、支え合いの輪から漏れている方が3割程いることが県社協の調査で分かりました。知らないうちに孤立し、周囲もその人を気にしなくなる。そして、社会的孤立が深くなっていく。その人が望まない孤立です。災害時における、生活支援相談員の合言葉は「誰一人ひとりぼっちにしない」でした。この災害に関わった多くの支援者の願いでもあったと思います。この災害対応の理念は、平時にこそ必要な地域福祉活動の理念でもあります。この取組を将来に繋いでいくことが、この災害の最大の教訓です。

【コメンテーター】
神奈川県立保健福祉大学
名誉教授　山崎 美貴子 氏

市川さんは、支援する側・される側の関係の中で、勇気を持って何ができるのか、その先に一緒に歩む道を探し始め、民生委員としての実力を教えてくださいました。

今野さんは、11年間現場にいて被災者と一緒に交流の場を作りました。世帯訪問で一人ひとりに寄り添い続けることは、簡単なことではなかったと思います。

右京さんは、復興後の未来について説明されました。これからの地域づくり、現代社会の中で、短期的・長期的に予想できる物事をつないで作り直していく仕組み作りや、IT化が進む中で何ができるかを考えながら、近未来の構図を作ってくださいました。

私たち一人ひとりに困難があります。困難は忍耐を、忍耐は熟達を、熟達は希望を生みます。希望は決して絶望で終わらない。皆さんと一緒にこの11年間を歩かせていただいたことは、生涯忘れることができません。心からお礼申し上げます。

トークセッションの様子